

町の天使

小川未明

青空文庫

えす Sという少年がりました。

毎日、学校へゆくときも、帰るときも、町の角にあつた、菓子屋の前を通りました。その店はきれいに飾つてあつて、ガラス戸がはまつていて、外の看板の上には、翼を拡げたかわいらしい天使がとまつて、その下を通る人々をながめていたのであります。

少年は、すこし、時間のおくれたときは、急いで、夢中でその前を過ぎてしまいましたけれど、そうでないときは、よくぼんやりと立ち止まつて、毎日のように見る天使を、飽かずに仰いでいることがありました。

なぜなら、その天使は、あちらの雲切れのした、北の方の青い空から飛んできて、ここにとまつたようにも思われたからでした。少年には、それほど、それほど、あちらの遠い空が、なんとなくなつかしかったのであります。そして、その天使と青い空とを結びつけて考えると、美しい、また愉快ないろいろな空想が、ひとりでに、わいてきたからであります。「おまえは、いつ、あのあちらの空へ帰つてゆくのか？」と、小さい声でいったりなどしました。しかし天使は、ただこれを聞いても笑っているばかりでした。

雨の降る日も、天使は、そこにぬれながらじつとしていました。また、霧の降った日も

……。けれど、少年は、夜になって、大空がぬぐわれたように星晴れがして、寒い風が吹く真夜中には、きつと、天使が自由に、あの翼をふるって、大空を飛びまわるのであらうと思ひました。けれど、人は、だれもそれを知らない。そして、天使は、いつもじつとしてゐるとばかり思つてゐるのだと考えました。

「僕は、おまえが、夜になって、だれも人間が見ていないときに、空を飛びまわるのを知つてゐるのだよ。」と、少年は、天使に向かつていいました。

こういつても、天使は、ただ黙つて笑つてゐるばかりでした。

एस少年は、病氣にかかりました。

もう幾日も学校を休んで、一間にねていました。そのうちに、秋もふけて、いつしか冬になりかかり、木がらしが家のまわりに、吹きすさんだのであります。いろいろの木立の葉が、ざわざわといつてささやきました。そして、はげしい風の襲うたびに、それらの葉たちは、ちやうど火の子のように、大空に飛び上がり、あてもなく野原の方へと駆けてゆくのでした。

少年は、窓から、いつしか、さびれきつた庭の中をながめていました。かしの木の下に、たくさんどんぐりが落ちていました。また、あちらの垣根のところには、からすう

りが、いくつか赤くなつてぶらさがっていました。ここから見ると、たいそう寒く、さびしい林の中ではあつたけれど、そこにはいい知れぬおもしろいことや、楽しいことがあるとみえて、いろいろの小鳥がやってきて、枝から枝へ飛びうつつては、鳴いているのが見えるのであります。

「もう、じきに雪がくるだろう……。」「と、少年は思っていました。

「戸を開けて、寒い風に当たつてはいけませんよ。」と、お母さんにいわれて、少年は、また床の中にはいりました。そして、あいかわらず、家の外にすきぶ木がらしの音を聞いていました。

「早く、病気がよくなつて、学校へいきたいものだな。」と、少年は思いました。けれど、それまでには、なかなかよくなかなかつたのであります。

お友だちは、遠慮をして遊びにきませんでした。少年は、もう長いこと、お友だちの顔を見ません。そんなことを思つて、さびしがつていました。

ちようど、そのとき、あらしの中をだれか自分を呼びにきたものがあります。

「Sちゃん、遊ぼう!」と、外で自分を呼んでいました。

はじめは、気のせいではないかと考えました。それで、しばらく、床の中で、じつと考

えていました。あらしの音は、いよいよはげしくなつて、林の鳴る音や、落ち葉の風にまかれて飛ぶ音などがしていたのであります。また、このあらしの間にまじつて、

「Sちゃん、遊ぼう！」と、自分を呼んでいる子供の声がきこえてきました。

「だれだろう？」と、少年は思つて、床から出て窓の障子を開きました。すると、あちらに、赤い帽子をかぶった二人と、黒い帽子をかぶった一人の子供が、三人でおもしろそうに遊んでいて、自分を手招ぎしたのであります。

「だれだい？」と、少年は呼びかけて、その三人をじつと見守りました。すると、一人は年ちやんで、一人は正ちやんでありました。黒い帽子をかぶっている子供は、まったく知らない子供のようには思われました。

「年ちやんに、正ちやん、君は、どうしたんだい、死ななかつたのかい。不思議だなあ……。」と、少年は、死んだはずの二人の友だちが、このあらしの吹く日に、どこからか帰つてきて、自分を誘いにきたのを、少なからず不思議に考えたのでした。

三人は、しきりに、自分を手招ぎしていました。少年は、お母さんに聞いてみて、すぐにも外へ出ていこうと思ひました。彼は、ふらふらとへやの中を歩いて、茶の間の方へいつて、

「年ちゃんとしと正ちゃんしょうが迎えむかにきたから、いつてもいい？」と、お母さんかあにたずねました。すると、お母さんかあは、走はしつてきて、

「なんで、おまえはねていないのです。」といつて、しかられました。

少年しょうねんは、年ちゃんとしに、正ちゃんしょうが外そとで呼よんでいるから、二人ふたりを家うちへいれてくれと頼たのみました。

「僕ぼく、さびしくて、しかたがないんだから……。」「といいますと、お母さんかあは、青い顔あお かおをして、目めを大きくみはつて、少年しょうねんをにらみました。

「なんで、年ちゃんとしや、正ちゃんしょうが、おまえを呼よびにくるものか。おまえは、夢ゆめを見たんだよ。」といいました。

少年しょうねんは、それを打ち消うけすようにして、

「お母さんかあ！ ほんとうに、外そとで僕ぼくを呼よんでいたんですよ。うそだと思おもったら、見みてごらんなさい。」と、少年しょうねんはいいました。

「じゃ、私わたしが見みよう。そして、もしいたら、しかってやろう！」と、母親ははおやはいつて、窓まどから、あちらを見みました。

「だれもないじゃないか。おまえは夢ゆめを見たのだよ。」といつて、母親ははおやは、寒さむいので、

障子しょうじをぴしりと閉めてしまいました。

その日から、少年しょうねんの病氣びようきは、いつそう重おもくなったので、家の人たちは、みんな心配しんぱいしたのであります。

少年しょうねんは、窓まどからのぞいて見ると、お菓子屋の看板かんばんの上にとまっている天使てんしが、ひとりで、あらしの中に遊あそんでいたのでした。

「君きみは、いつも真夜中まよなかになると、人の知らない間に空そらを飛とんで、星の世界ほしせかいへいたり、また林の中へはいたりして遊あそんでいるのだらう……。」と、少年しょうねんはたずねました。

天使てんしは、はずかしそうな顔かおをして笑わらっています。

「今日は、空そらがよく晴はれて、それに風かぜが寒いから、つい天国てんごくが恋こいしくなつて、飛とんでいました。」と、天使てんしは、答こたえました。

少年しょうねんは、あちらの青い空そらが、ただなんということなしに慕したわしくなりました。それに、海うみの方ほうへといつてみたくなりました。

「僕ぼくをつれていってくれないか？」と、天使てんしに向むかつて頼たのみました。

小さな天使てんしは、しばらく考かんがえていましたが、魔術まじゆつで、少年しょうねんを小さく小さくしてしまいました。

「さあ、しつかりと私の脊中にお負さりなさい。」と、天使はいいました。少年は、天使の白い脊中にしつかりと抱きつきました。いつしか、青い空と白い雲の間を縫うようにして、飛んでいたのであります。

目の下には、海が、悲壮な歌をうたつて、はてしもなく、うねりうねりつづいていました。風は、吹いて、吹いていました。少年を乗せた、天使は、北へ、北へと旅をつづけたのであります。

そのうちに、紅い潮の中から、一つの美しい島が産まれました。天使は、その島の空を飛びまわりました。見下ろすと、そこには、真っ白な大理石の建物が、平地にも、丘の上にもありました。その有り様は、見たばかりでも神々しさを覚えたのでした。どんな人がこの島の中に住んでいるだろうか？少年は、もし美しい人たちで、自分を愛してくれるような、やさしい人々であつたら、自分はこの島に住みたいと思いました。しかし、その島は、こんなふうには神々しかつたけれど、しんとして音ひとつしななければ、また煙の上つていともありませんでした。地の上に、赤いところや、白いところの見えるのは、花が咲いているのだと思われました。そのうちに、下の道を白い衣服をまとった人々が、脇見もせずに歩いていくのが見えました。その人々は、尼さんが会堂

へゆくときのように、笑いもしなければ、話もしませんでした。これを見ると、体じゅうに寒けを催しましたので、この島へ降りてみようとは思わなくなりました。

「あんまり遅くなると、みんなが心配するから、もう、かえりたい。」と、少年は天使にいいました。

小さな、美しい翼を持った天使は、たそがれ方の空を矢のように、速やかに飛んで、ふたたびなつかしい、わが家の見える野原の方へと飛んできました。

「さあ、ここですよ。」といって、天使がおろしてくれたので、ほっとして少年は、目を開きました。

すると、自分のまくらもとは、心配そうな顔つきをした医者と、青い顔をしたお母さんと、妹と、お父さんたちがすわって、自分の顔を見つめていたのです。

少年は、どうしたのかと思つて、不思議でならなかったのです。

それから、数日たちました。少年の病氣は、いいほうに向かいました。医者は、眉を開いて笑いました。母親の顔にもはなやかな笑いが浮かびました。

あいかわらず、あらしは、窓の外に吹いて、雪すらおりおり、風にまじって落ちてきました。けれど、そんなに深くは積もりませんでした。そのうちに、少年の病氣はま

ったくよくなつて、元氣げんきよく学校がっこうへ通かようことができるようになったのであります。
 ある日ひ、少年しょうねんは、菓子屋かしやの前まえを通とおりかかつて、天使てんしは、どうしたろうと思おもつて、仰あお
 いでみますと、そこにはありませんでした。驚おどろいて友だちともに聞きいてみますと、いつかの大おお
 きなあらしのとき、落おちて壊こわれてしまつたといいました。少年しょうねんは、すこしくと、道みち
 のはたに天使てんしの翼つばさのかけらが落おちていたのを見みつけました。少年しょうねんは、天使てんしが、いよい
 よ大空おおぞらに上のぼつてしまつたのだらうと思おもいました。それから、つぎの休やすみ日びに凍こおつた雪ゆきの
 上うへを渡わたつていくと、林はやしの中なかに赤あかい帽子ぼうしが一つ落おちていたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集1」丸善

1927（昭和2）年1月5日発行

初出：「赤い鳥」

1926（大正15）年1月

※表題は底本では、「町《まち》の天使《てんし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2020年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

町の天使

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>